

ウラナミシジミの裏面斑紋に異常を認める記録

島崎正美・島崎能子

ウラナミシジミはほとんど異常型をみない蝶だが、裏面の波状斑紋に広範囲の異常がみられる珍しい個体を観察したので報告する。

2024年10月7日、例年より約2週間遅れて開花した彼岸花を観賞する目的で加古川市郊外の田園地帯を訪れた際、彼岸花にカメラを向けていた妻が奥の方に蝶が止まっていると教えてくれた。この日は時折小雨がぱらつく天候で、彼岸花の群落の間に自生するエノコログサの花穂にとまって休息中の蝶が後翅を破損したウラナミシジミ（図1）であることはすぐにわかった。ビデオカメラでズームアップしながら撮影記録をとったが翅表が見られないままで雌雄の判別はできていない。撮影中と帰宅してコンピュータに画像を取り込んだ段階でもやや灰色が目立つという感じはしたが裏面斑紋の異常には気づかなかった。

2024年の初秋はウラナミシジミの観察機会が少なく、10月9日に三木市の三木山森林公園までツマグロキチョウの観察に出向いた際、曇り空のせいで池端の植物にとまって動かないウラナミシジミ（図2）を撮影すると、ファインダーにみる裏面の波状斑紋がくっきりと目立ってその色調もよくみる淡褐色で、この時点で10月7日に撮影した個体の裏面の色調が一様に灰色を帯びていたことを思い出した。

2個体の撮影記録を見比べて初めて10月7日に記録した個体の裏面が、特に後翅の中央部外よりに通常上方2番目で幅広く下方に向けてほぼ直線状で細長く続く筋



図1. 異常型. 2024年10月7日, 加古川市志方町広尾.



図2. 2024年10月9日, 三木市三木山森林公園.

模様が、三日月状に湾曲した連続紋になっているなど、全面的に正常個体とはかなり違った斑紋異常型だと確認できた。先述したように雌雄は不明で正常型との翅表の違いもわからないままだが、以下に改めて斑紋異常型の観察データを示す。

観察日 2024年10月7日

観察地 加古川市志方町広尾

発見者 島崎能子

撮影者 島崎正美

日本産蝶類の変異・異常型図鑑を公表されておられる新田氏の記録の中にウラナミシジミ2個体の例が見られるが、今回のような斑紋異常は初めての記録だと思われる。

○参考文献

新田敦子, 双尾 II. 日本の蝶類 変異・異常図鑑 (URL: https://abzukann.choumusubi.com/simpleVC_20101216171845.html)

(Masami SHIMAZAKI 兵庫県高砂市)

(Yoshiko SHIMAZAKI 兵庫県高砂市)

キタテハ夏型の遅い記録とヒメアカタテハの誤求愛

島崎正美

2024年は6-8月の異常高温のせいで夏期に蝶の姿が少ないなど発生状況に例年とは異なる変化が見られた。FacebookなどのSNSにキタテハの秋型の情報が多くみられるようになった10月、例年であれば秋型のキタテハがセイタカアワダチソウの花に集まる、加古川河川敷へ11日に訪れた。しかしカナムグラが広く群生する場所で探すがキタテハは全く現れず、セイタカアワダチソウを訪花したツマグロヒョウモン雌雄個体、センダングサ周りを飛び交うモンシロチョウとヤマトシジミ、カワヤナギの葉上でテリ張りをするコムラサキなどを見ただけだった。翌12日14時過ぎの訪問でも、観察できる蝶はカワヤナギまわりで同志の追飛翔を繰り返すコムラサキと、絡み飛翔に巻き込まれるルリシジミ、そしてカワヤナギの葉上に静止するコムラサキの♀などで、キタテハがやってくる気配がないまま時間が過ぎていった。15時半を過ぎた頃、ようやく低い位置で旋回飛翔するタテハチョウが現れ、カナムグラの葉上に静止した時点で紛れもないキタテハ（図1）だと確認。ほぼ新鮮な夏型で、飛翔時に秋型のオレンジ色がみられなかったわけが納得できた。幅広い翅形から産卵目的でやってきた♀